

修士論文(要旨)
2015年1月

初級会話授業に関する一提案
-中国 R 大学と日本の I 日本語学校をもとに-

指導 佐々木倫子 教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
213J3010
吳昱燕

Master's Thesis (Abstract)

January 2015

A Proposal for Elementary Japanese Conversation Classes: Based on Case Studies of a
University in China and a Japanese School in Japan

Wu Yuyan

213J3010

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J.F. Oberin University

Thesis Supervisor: Michiko Sasaki

目次

第1章 研究の背景と目的	
1.1 研究の背景	1
1.2 研究の主な目的	2
1.3 先行研究	3
第2章 アンケート調査	
2.1 調査概要	6
2.2 調査目的	6
2.3 アンケート調査の結果と分析	6
第3章 インタビュー調査の概要	
3.1 対面インタビュー調査の概要	17
3.2 書面インタビュー調査の概要	19
3.3 I 日本語学校のインタビュー調査概要	20
第4章 インタビュー調査の結果と分析	
4.1 協力日本人教師と協力中国人教師の比較	23
4.2 協力大学の日本語教師とI日本語学校の日本人教師の比較	35
第5章 総合的考察	
5.1 初級の会話授業プランの前段階	42
5.2 初級会話授業への一提案	43
5.3 まとめと今後の課題	49
謝辞	51
参考文献・参考ウェブサイト	a~c
巻末資料 1 【アンケート調査票、R 大学・日本語版】	I
巻末資料 2 【アンケート調査票、R 大学・中国語版】	III
巻末資料 3 【アンケート調査票、I 日本語学校・日本語版】	V
巻末資料 4 【アンケート調査票、I 日本語学校・中国語版】	VII
巻末資料 5 【インタビュー調査協力の同意書、R 大学】	IX
巻末資料 6 【インタビュー調査協力の同意書、I 日本語学校】	X
巻末資料 7 【フィードバックシート】	XI

要旨

近年、中国の大学における日本語学習は非常に盛んになり、中国の日本語教育機関数、日本語を専攻とする学習者の数が毎年増加する傾向にある。中国の大学における日本語教育は、実際の言語運用能力の育成を目標として重視はされているが、しかし多くの先行研究から、日本語を専攻としている学習者は言語知識を習得しているが、実際の運用があまりできないという問題を抱えている。中国の大学における会話の授業はコミュニケーション能力を養成するため、重要な役割を果たしていると考えられる。稿者は中国の大学における日本語専攻と日本の日本語学校での学習経験を持つ。そして、中国の大学における会話授業がどのように進められているのか、改めて明らかにしたいと考えた。また日本語学校の先生の教え方にも寄与できる面もあるのではないかと考えたことが本研究に取り組んだきっかけである。

本研究は主に中国の R 大学の 85 名の学習者を対象にアンケート調査を実施した。また、中国の R 大学の日本語教師 4 名と、日本語の会話や日本語の教育に関わるインタビュー調査を行った。そのほかに、日本の I 日本語学校の学習者 38 名にアンケート調査を行い、その I 日本語学校の教師 5 名にインタビュー調査を実施した。学習者のニーズや要望と日本語教師の意見を解明し、初級会話授業を改善するための授業案を提案する。

調査の結果と会話の授業への提案は以下のようにまとめられる。

アンケート調査から、中国の R 大学の初級会話の授業では、日本の I 日本語学校より、授業で話す機会が少なく、教師が多くの文法、表現などを教える状況が浮かび上がる。学習者がなごやかな雰囲気の中で勉強することを工夫するだけでなく、教師は学習者の関心や興味を引き付けるための教室活動や授業の内容をより一層工夫すべきだということが分かった。

インタビューの分析は佐藤(2008)を参考にした。インタビュー調査の結果から、中国の大学において、教師は主導権を握り、授業を進めていることが分かった。そのため、教師はより一層学習者のニーズを把握し、問題を改善しようと努力することが今後の日本語教育の課題となっていることが分かった。そこで、今後の改善点として、まず第一に、学習者の興味を喚起するため、多様な生教材や視聴覚メディア教材を取り入れるべきだと考える。また第二に、文法やモデル会話の暗記と実際の運用をつなげるには、実際の場面を設定し、ロールプレイやディスカッションやゲームなどの自由度が高い教室活動を重視すべきだと感じた。さらに三番目として、初級の学習者向けの会話の授業において、教師は適切な用語や言語を用い、簡潔に分かりやすく話すことに重点を置くことを挙げる。

アンケート調査の結果とインタビュー調査の結果を踏まえて、初級の学習者向けの会話の授業において、実際の授業で扱う教室活動を検討し、改善案を提案した。まず、「初級会話の授業目標」、「改善すべき点」、「取り扱う活動」という 3 つの視点を考えた。調査結果に基づいて、初級前半のクラスにおいて、ある特定の話題に沿って 1 分間スピーチのようなプレゼンテーションをする教室活動を取り入れるのも面白いと考えた。初級後半のクラスでは、ペアでロールプレイをするなど、会話練習をする教室活動をより多く取り入れるべきだと考える。さらに、調査の結果を踏まえ、学習者と日本語教師が望む会話の授業では、「話す機会を増やす」、「生教材の使用」、「実際の運用」という点を考えるべきで、協力教師の教育経験を基に、初級の前半と初級の後半の改善案を提案した。

本研究では、初級前半と初級後半の授業案を1つずつ提案したが、今後、稿者としては教育現場で実践を積みながら、試行錯誤を繰り返しながら、修正を加え改善していくことになるであろう。また、授業時間には制限があるため、授業外と授業内の支援をどのように連携させていくのかを今後の課題としたい。

参考文献

- 会田久子 (2000) 「中級レベルにおける会話授業」『留学生センター紀要』第3号, 新潟大学, pp. 40-49
- 尹智鉉 (2007) 「日本語学習者の第二言語習得と学習ストラテジー」『人文科学研究所研究紀要』第81号, pp. 17-29.
- 宇佐美まゆみ (2011) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2011年版」
- 岡崎眸・岡崎敏雄 (2001) 『日本語教育における学習の分析とデザインー言語習得過程の視点から見た日本語教育』凡人社
- 韓明 (2004) 「中国遼寧省の学校における日本語教育についての研究」『昭和女子大学大学院日本語教育研究紀要』第2号, pp. 57-64
- 木田真理・小玉安恵・長坂水晶 (2012) 『「話すことを教える」国際交流基金 日本語教授法シリーズ6』ひつじ書房
- 小室リー郁子 (2009) 「海外の日本語教育における映像素材活用の意義とその実践報告」『Journal CAJLE』第10号, p. 89
- 高木美嘉 (2007) 「他の発見から自己の創造を促すコミュニケーション型初級クラスの構想」『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』第20号, pp. 119-136
- 谷内美智子 (2002) 「第二言語としての語彙習得研究の概観ー学習形態・方略の観点からー」『言語文化と日本語教育 2000年5月特集号』p. 163
- 中井陽子 (2012) 『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』ひつじ書房
- 長坂水晶・木田真理 (2011) 「中国の大学の日本語授業における会話指導に関する調査ー中・上級レベルを対象とした教室活動の実態と教師の意識ー」, 『日本語教育紀要』第7号, pp. 43-57
- 日高吉隆 (2006) 「深圳大学日本語科における「会話」授業の課題」『創価大学別科紀要』第18号, pp. 50-62
- 堀口純子 (2003) 「中国の大学における日本語教育の動向」『明海日本語』第8号, pp. 11-12
- 宮玲子 (2011) 「外国語学習における“連想記憶術”の活用と事例」『目白大学人文学研究』第7号, pp. 255-263
- 山本忠行 (2013) 「日本語直接教授法再考ー創造的日本語教育をめざしてー」『通信教育部論集』第16号, p. 69
- 冷麗敏 (2005) 「中国の大学における「総合日本語(精読)」に関する意識調査ー学習者と教師の回答を比較してー」『日本言語文化研究会論集』第1号, pp. 59-73

参考 URL (2014年11月20日 最終検索日)

国流交流基金 HP <http://www.jpfg.go.jp/j/>

中国日语教学研究會 <http://zhgryjx.tjfsu.edu.cn/default.asp>